

犀角経と辟支仏

長崎法潤

『スッタニパータ』第一章第三「犀角経 (khaḅḅa viṣaṇasutta)」は、第三五詩から第七五詩までの四一詩よりなる經典である。各詩は、第四五詩を除いて、その第四句はすべて「犀の角のように独り歩め (eko care khaḅḅa viṣaṇakappo)」という句によって結ばれている。それらの詩には、あらゆる生きものを害することなく、愛欲を離れ、友人、仲間との関わりを避け、欲望の対象を離れ、在家の束縛をすべて断ち切り、寒さ、暑さ、飢え、渇き、風、炎暑、虻、蛇などの危難に打ち勝ち、目を伏して注意し、うろつかず、感官を護り、独坐し、瞑想し、煩惱を捨て……犀の角のように、ただ独りで道を求める求道者の姿が説かれている。

犀の角のように、ただ独りで道を歩む求道者に対して、「犀角経」では辟支仏 (pacceka buddha) という名称は与えられていない。また、辟支仏とは何の関係もなさそうである。ところが、「犀角経」四一詩はそのまま南伝大蔵経の小部『アパダーナ』第一章第二「辟支仏の譬喩」という辟支仏を説明する五七詩のなかに引用〔八一―三頁〕されている。小部『チュッラ・ニッデーサ』〔CND シャム本、三一七―四二九頁〕に「犀角経」に対する逐語的解釈がなされているが、そこにおいて、「犀の角のように」とは辟支仏の喩であり、「犀角経」は辟支仏の説いた詩であると記されて

いる。注釈『パラマッタ・ジョーティカー』(四六一―三二頁)でも「犀角経」の四一詩は辟支仏の所説とされている。『マハーヴァスツ』^①にも辟支仏の詩として六詩が伝えられている。

『スッタニパータ』に対する古い注釈書として知られる『ニッデーサ』(義釈)は、『マハー・ニッデーサ』(大義釈)と『チュッラ・ニッデーサ』(小義釈)に分かれ、初期アビダルマ文献が編纂された西暦前三―二世紀ころ書かれたものである。『マハー・ニッデーサ』は『スッタニパータ』第四章の注釈であり、『チュッラ・ニッデーサ』は第五章と第一章第三「犀角経」に対する注釈である。現存の『スッタニパータ』は五章七二経一一四九詩より構成されているが、『ニッデーサ』が作られたころ、『スッタニパータ』の章や経は独立に伝えられていたことが明らかである。

『スッタニパータ』は古く成立した經典であるが、そのうち、『ニッデーサ』で注釈されている第四章と第五章とは、パーリ語、サンスクリット語、漢語、チベット訳の仏典にも伝えられ、最も古く成立したと考えるのが定説となっている。したがって『ニッデーサ』で注釈されている「犀角経」も、最古の經典と見て間違いないであろう。

すでに記したように、「犀角経」は辟支仏の詩であるという考えは、『チュッラ・ニッデーサ』のなかに説かれている。『チュッラ・ニッデーサ』が成立する以前に「犀角経」と辟支仏との関連性が定着していたはずである。大衆部系の説出世部に属する『マハーヴァスツ』においても「犀角経」の詩と辟支仏との関連性が見いだされる。この点から考えれば、「犀角経」と辟支仏との関連性は部派分裂以前にまで遡るのではなからうか。

二

「犀角経」各詩の第四句「犀の角のように独り歩め (eko care klaggavisāṇakappo)」とはどのような意味であろうか。『チュッラ・ニッデーサ』の注釈にもとづきながらその意味を考察したい。

まず、「独り (eko)」とは、かの辟支仏 (paccekasambuddha) は、(一)出家の称によって (pabbajjā-saṅghatena) 独りである。(二)伴侶のない意味によって (aduttiyāthēna) 独りである。(三)渴愛の捨断の意味によって (taṇhā-pahānatthēna) 独りである。(四)専ら貪欲を離れている (ekānta-vīta-rāgo) から独りであり、専ら瞋恚を離れている (ekānta-vīta-doso) から独りであり、専ら愚痴を離れている (ekānta-vīta-moho) から独りであり、専ら煩惱を離れている (ekānta-vīta-nikkilesa) から独りである。(五)一行道を行く (ekāyana-maggam gato) から独りである。(六)独り無上の辟支菩提を現に正覚された (ekam anuttaram paccekasambodhin abhisambuddho) から独りである。[C.N.d, pp. 112-113]

以上のように、『チュラ・ニッデーサ』では「独り (eko)」を辟支仏が有する六種の徳に結びつけて解釈している。続いて、それぞれについてくわしく説明しているが、その要点を記せば次のようになる。まず、

(一)出家の称によって独りである、とは、かの辟支仏は家居の障礙 (pāli-bodha)、妻子の障礙、親戚の障礙、財宝の障礙を断じ、髪と髭を剃り、袈裟衣を着け、家より非家に出家し、無一物の状態になって、独り行ずることである。

(二)伴侶のない意味によって独りである、とは、辟支仏はそのように出家して、独り森林の辺鄙な、人の声の聞こえない、騒音の聞こえない、人々の気配のない、人に隠れて住する、瞑想にふさわしい場所に住する。独りで生活し、独り村に行乞に行き、独り行乞より帰り、独り密かに瞑想し、独り経行をなし、独り行ずることである。

(三)、(四)についてはそのままの意味であり、特別な説明がなされていない。

(五)の一行道とは、四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覚支、八支聖道である、と説明されている。

(六)独り無上の辟支菩提を現に正覚されたから独りである、について次のように説明されている。覚 (bodhi) とは、四「沙門」道における知慧、慧根、慧力、擇法覚支、観慧、観、正見である。辟支仏はその辟支仏智 (pacceka-buddhanāna) によってあらゆるの真理 (sacca) を覚られた。すなわち、「一切の行 (sabbe saṅkharā) は無常である」

「一切の行は苦である」「一切法は無我である」と覺られた。「無明に縁って行あり」「行に縁って識あり」……「生

によって老死あり」と覺られた。「無明の滅より行の滅あり」「行の滅より識の滅あり」……「生の滅より老死の滅あり」と覺られた。「これは苦である」「これは苦の集である」「これは苦の滅である」「これは苦の滅に至る道である」と覺られた。「これらは漏である」「これは漏の集である」「これは漏の滅である」「これは漏の滅に至る道である」と覺られた。「これらの法は知通されるべきである」「これらの法は遍知されるべきである」「これらの法は捨断されるべきである」「これらの法は修習されるべきである」「これらの法は作証されるべきである」と覺られた。六触、五取蘊、四大種の集と滅没と過患と出離とを覺られた。「あらゆる集の法はすべてこれは滅の法である」と覺られた。あらゆる覺るべき、隨覺すべき、正覺すべき、觸知すべき、作証すべきものはすべて、かの辟支菩提智 (paccekasambodhi) によって覺り、隨覺し、正覺し、解知し、作証した。このように、かの辟支仏 (paccekasambuddha) は、独り無上の辟支菩提 (paccekasambodhi) を現に正覺したから、独り (eko) である。

以上のように、『チュッラ・ニッデーサ』において、「犀角経」の「独り」を辟支仏と関連づけて注釈している。すなわち、辟支仏は独り出家し、独り人里をはなれて森林に住し、瞑想し、独り煩惱を離れ、独り四念処……八聖道を實踐して、独り無上の辟支菩提 (paccekasambodhi) を正覺された。辟支仏智 (paccekabuddhanāna) によって覺った真理とは、一切法の無常、苦、無我、十二縁起の順観と逆観、四聖諦などである。

阿含・ニカーヤにおいては辟支仏が十二縁起を内観して正覺したことはまったく説かれていない。辟支仏と十二縁起とが結びつけられたのは後世であり、それによって *pratyaya-buddha* (縁覚) という語ができあがったと考えられる。したがって、『チュッラ・ニッデーサ』に辟支仏と十二縁起とが結びつけられているのは注目されるべきである。

ところで、『スッタニパータ』第一一三六詩は第一句「独り〔煩惱の〕闇をのぞいて坐り (eko tamand'asino)」ではじまり、ゴータマ・ブッダが具光者、光照者などの徳をそなえていることを讃えている。その第一句の「独り (eko)」

を同じ『チュッラ・ニッデーサ』[CND シヤム本、p. 220]で注釈し、世尊は、(一)出家の称によって独りである、……(六)独り無上正等覚を正覚している (ekam anuttaram samma-sambodhim abhisambuddho) から独りである、と辟支仏とまったく同じ分け方をしている。

さらに、それらの説明については、(一)の場合は、最初に、世尊は黒髪の青年で幸福であった時期に、出家を希望せず、涙を流して泣いている父母を捨て、親戚を捨てて出家したことを記し、続いて辟支仏の場合と同じ説明が加えられている。

(二)、(三)、(四)、(五)は辟支仏の場合と同文の説明がなされている。

(六)については、「かの辟支仏 (so paccekasambuddho)」が「世尊 (Bhagava)」になり、「辟支菩提 (paccekabodhi)」が「正等覚 (sammasambodhi)」になっている。辟支仏は「その辟支仏智 (paccekabuddhanāṇa) によって」真理を覚ったが、世尊は「その菩提智 (bodhiṇāṇa) によって」覚ったことになっている。後半の「……すべて、かの辟支菩提智 (paccekabodhiṇāṇa) によって覚り」は、「……すべて、かの菩提智 (Bodhiṇāṇa) によって覚り」となっている。他はすべて辟支仏も世尊も異なることはない。

世尊は正等覚を正覚し、辟支仏は辟支菩提を正覚し、覚りの名称が異なっている。ところが、覚りの内容は、世尊も辟支仏もまったく同一である。すなわち、無常、苦、無我、縁起の順観と逆観、四聖諦などである。同じ内容の覚りであるが、その名称のみを区別したと見るべきであろう。

阿含・ニカーヤにおいては辟支仏と十二縁起との結びつきは見られないが、『チュッラ・ニッデーサ』の注釈書は、辟支仏と十二縁起とを結びつけている。さらに、世尊と辟支仏とはまったく同じ内容の覚りを得たことになっている。つまり、世尊の正覚をそのまま辟支仏に当てはめている。「独り」すなわち無師独悟という点からすれば、世尊も辟支仏もまったく同じ覚りを得たと考えられていたからではなからうか。

「犀の角のように独り歩め」という句の「独り (eko)」についての解釈の次に『チュッラ・ニッデーサ』では「歩め (care)」をとりあげ、さらに「犀の角のように (khaggavisanākappo)」について次のように説明している。

「犀の角のように (khaggavisanākappo) とは、たとえは犀 (khagga) というものの角 (visana) は、ひとつ (eka) であり、第二者 (同伴者) あることがなく (adutiya) ように、まさにそのようにかの辟支仏 (paccekasambuddha) はそれに譬えられ (takkaṅkappo)、それに等しく (tassadiṣo)、それに類似している (tappatihāgo)。たとえは、きわめて塩辛いことを塩のようである (tonakappo) と言ひ、……大神通を得た声聞を師のようである (satthukappo) と言ふごとくである。このように、かの辟支仏はそれ (犀の角) に譬えられ、それに等しく、それに類似し、独り、同伴者 (第二者) なく、結縛を脱し (muttabandhana)、完全に世間において行じ (carati)、遊歩し (vicarati)、行為し (inivati)、遂行し (vatteti)、動み (paleti)、持続し (yapeti)、維持する (yāpeti)。これが、犀の角のように独り歩け、[の意味]である。」[CND シャム本、pp. 323-324]

『チュッラ・ニッデーサ』の注釈者によれば、「犀の角のように」とは辟支仏の譬えである。犀の角はひとつであり、第二者がなく、独りで、同伴者なく、結縛 (Bandhana) を脱した辟支仏が、完全に世間で行ずる姿を「犀の角のように独り歩け」という句で表現されていることになる。

ところで、『スッタニパータ』の「犀の角のように独り歩け」という句は、はたして、「独り独立して歩け」という意味であろうか、それとも、結縛を脱して、独悟した者にのみこの句が用いられるのであろうか。『チュッラ・ニッデーサ』ではその点は明確にされていない。

三

すでに記したように、「犀角経」の khaggavisaṇa について、初期アビダルマ文献成立のころ書かれた『チュッラ

・ニッデーサ』では「犀の角」と注釈していた。五世紀前葉にブッダゴースアによって書かれたパーリの注釈書『パラマッタ・ジョーティカー』でも同じように「犀の角」の意味に理解している [P] II, p. 65。また「犀角経」の第三六部行独覺との二種に分けるが、^④鱗角喩とは「犀角経」の *khagga-visāṇakappo* と辟支仏との関連性にもとづいてできた言葉である。したがって、パーリの注釈でも漢訳でも *khagga-visāṇa* を「犀の角」と解し、犀の一角のように、ただ独り遊行することの喩として解釈している。

ところでエジヤトンには、*khadga-visāṇa* は「犀」、すなわちサンスクリット語の *khadgin* の意味である、と記している。^⑤つまり、「劍 (*khadga*) の [ような] 角 (*visāṇa*) をもてるもの」、すなわち「犀」と理解している。したがって、この譬喩は、犀の角についてではなく、孤独な生き方をする犀という動物についてである。*khadga* は「劍」、*khadgin* は「劍をもてるもの」、犀であるが、*khadga* はまた「犀」の意味にも用いられる。したがって、パーリ語の *khagga-visāṇa* にも「犀の角」と「犀」との両方の意味が成り立つことになる。

櫻部建博士もエジヤトン説を支持している。^⑥博士は、「犀角経」第四五詩、第四六詩が『ダンマパダ』三二八、三二九に相当し、『ダンマパダ』三二九では第四句の後半が「犀角経」とは異なつて、*māṅḅarahaṇe va nāgo* (林中における象の如くに) になっていることに注目している。すなわち、『マッタニパータ』をそのまま引用している『アパダーナ』ではこの詩だけが『ダンマパダ』の方に合致し、中部第七二経の引用でも『ダンマパダ』の方に合致する。「思うに此の偈の第四句は *eko care khagga-visāṇakappo* と *eko care māṅḅarahaṇe va nāgo* との二つの形があり、何れも行なわれていたのであろう。……これらの二つの形が何れも行なわれているということは、これら二つの形の意味上の大きな差別が無いこと、即ち象といい、犀と言つても、いずれも単に林中を独り遊行する点を喩えたものに過ぎないことを示している。」^⑦と櫻部博士は記している。つまり、*khagga-visāṇakappo* という喩は、犀の

一角についてはなく、林中を独り歩く犀という動物そのものについて言われたものである。

ところで、まったく同じ喩がジャイナ教文献にも見いだされる。khaggavisāṇam va egajaya (Sūya, II. 2. 64), khaggavisāṇam va egajae (Kaṭṭha, 117), khaggavisāṇam va egajate (Pañhā, 10, 11) などである。『カルパストラ』では khaggi (犀) という語を用いているから、khaggavisāṇam とは「犀の角」の意味に解している。『カルパストラ』におけるこの部分の前後の文章は、ほとんど同じ形で『スーヤガダ』にもあらわれている。『カルパストラ』のこの部分は、明らかに『スーヤガダ』から採ったと考えられる。その場合、『スーヤガダ』の khagga- を khaggi- に換えている。このことは、khagga- を khaggi- と同じ意味に解していたことを示している。したがって、ジャイナ教文献では「犀の角」と解していたことになる。

そこで、khaggavisāṇam va egajae 「犀の角のように独りである」という喩がどのような意味であろうか、『カルパストラ』によってそれを考察することにする。

「それ以来、沙門マハーヴィーラ尊者は非家となった。その歩行に、その言葉に、その行乞に、ものを受けるにも、資具飲器をとったり、おいたりするにも「生きものを害することのないように」用心をした。便、尿、唾、液、身体の不浄なものを排泄するにも用心をした。意に用心し、言葉に用心し、身体に用心した。意〔の行為〕を護り、身体〔の行為〕を護り、感官を護り、梵行 (ambhayaṇi) を護った。怒り (koha) なく、慢心 (māna) なく、偽り (mañ) なく、貪り (lobha) がなかった。〔尊者の心は〕静寂であり (santa)、寂静であり (pasanta) 、『欲望を押し止して心が』平和であり (upasanta)、般涅槃し (parinivvuta) 、『業物質が』漏れ入ることなく (anāsava) 、『執執なく (amaṇa)、無所有であり (akimcana)、繫縛を断ぎ (chinnaggaṇṭha)、汚れがなく (nirvāleva) 。

〔尊者は〕水を入れない銅器のようであり、汚れのない真珠母のようであり、妨げられず動く靈魂のようであり、支柱のない空のようであり、風のように障礙なく、秋の水のように清く、蓮の葉のように汚れず、亀〔の足〕の

ように感官は護られており、犀の角のように独りであり (kraggvisanani va egaiae)、鳥のように自由であり、バランダ鳥のように「常に」目醒め、象のように剛毅であり、牛のように強く、ライオンのように撃ちまかされることなく、マンダラ山のように揺れ動かさず、海のように深く、月のようにおとなしく、太陽のように輝き、本の黄金のように純であり、大地のようにすべてを耐えさせ、燃えている火のように光り輝く。 (Kappa, 117)

出家して沙門、苦行者となったマハーヴィーラは、殺生をおかすことのないようにあらゆる行動に用心を払い、規律を護り、煩惱を離れ、その心は寂靜になり、般涅槃し、「業物質が」漏入することなく、繫縛を断ち、汚れのない境地に達した。このような境地から、マハーヴィーラは最終的に独存 (kevala, 完全智) と呼ばれる最高智に至ったと『カルバーストラー』は次に記している。上記したように『スーヤガダ』でも同文の記述が見られるが、ここではマハーヴィーラではなく、修行者たちについて述べられている。

ところで、最高の独存 (kevala) に達する前段階であるが、般涅槃し、「業物質が」漏れ入ることなく、繫縛を断ち、汚れのない境地を、「水を入れない銅器のようであり、汚れのない真珠母のようであり、……」という多くの喩をもって表現している。それらの喩は、汚れのない、自由であり、純であり、不動なる境地を確立して光り輝く者を表している。それらの中に「犀の角のように独りであり (kraggvisanani va egaiae)」という喩も見いだされる。したがって、「犀の角のように独りであり」という喩は、他の多くの喩と同じように、汚れのない、自由であり、純であり、不動なる境地を表していると見なければならぬ。「……蓮の葉のように汚れず、亀「の足」のように感官は護られており、犀の角のように独りであり、鳥のように自由であり、……」の中で、「犀の角のように独りであり」だけが、ただ独り遊行することの喩であるとは考えられない。この喩も、完全智の前段階における、煩惱を離れ、汚れのない、自由であり、不動なる境地を表したものであろう。

ジャイナ教文献における「犀の角」の喩のように、『スッタニパータ』の「犀角経」の場合も同じように理解する

ことができるのではなからうか。すなわち、「犀角経」の「犀の角のように独り歩め」とは、汚れない、自由であり、不動な境地に至った者になることをもともと意味していたと考えられる。「犀角経」はもともと、そのような境地に至った修行者に関する詩をまとめた経典である。

四

「犀角経」には、愛欲を離れ、在家の束縛を断ち切り、危難に打ち勝ち、感官を護り、独坐し、瞑想し、煩惱を捨てて、自由で汚れない境地の修行者の姿について語られている。ところで、そのなかに、『ジャータカ』四〇八に見られる辟支仏説話と何らかの関連がありそうな詩もいくつか含まれている。

「金の細工人によってよく仕上げた、輝くふたつの金の「腕輪」は、一つの腕にはめれば、相ふれあって音をだす。それを見て、犀の角のように独り歩め。」[Sn, 48]

「このように、二人といっしょにいるならば、私に、むだな話や執着がおこる。未来にこの恐れがあることを観察しながら、犀の角のように独り歩め。」[Sn, 49]

「犀角経」第四八詩と第四九詩とは内容的にセットになっていて、『ジャータカ』四〇八に登場するナツガジ王説話に共通する内容をもっている。

『ジャータカ』四〇八「クンバカーラ・ジャータカ」には、辟支仏になった四人の王の物語が伝えられている。それは、カリンガ国のカランドゥ (Karaṇḍu) 王、ガンダーラ国のナツガジ (Naggaḍi) 王、ヴィデーハ国のニミ (Nimi) 王、パンチャラ国のドゥンムカ (Dummuḥka) 王のそれぞれが王位を捨てて辟支仏になり、ヒマラヤ山のナンダムーラ洞窟で修行をしていたが、神通力で空中を飛んでミナレスに行乞に来たとき、ブッダの前生である菩薩に出会った物語である。四王は、Karakarṇḍu (カリンガ国王)、Dummuḥka (パンチャラ国王)、Nami (ヴィデーハ国王)、

Naggar (ガンダーラ国王) の名でジャイナ教聖典『ウッタラジャーヤ』にも登場し、その注釈では四王が辟支佉^⑧になったことを伝えている。

ところで、辟支佉になったガンダーラ国のナッガジ王について、次のように詩で語られている。

「名工の麗しく磨いた〔腕輪の〕宝石を、婦人が両腕につけても音がでない。他と触れて音がでた。それを見て、私は比丘アーチャーリヤのもとに赴く。」[Ataka III, p. 380]

さらに、『ジャータカ』註では次のような話を伝えている。王が宮殿の玉座にいたときのことである。王は、宝石をちりばめた腕輪を両腕にはめた一人の婦人が香を擦りつぶすのを見ていた。やがてその婦人は、腕輪を右手から左手にはめ、右手で香を擦りつぶしはじめた。左手に移された腕輪は他の腕輪と触れ合って音をだした。王は、二つの腕輪が互いに触れ合ったときに音がでるということを見て、「離れていると、この腕輪は触れ合わないが、他の腕輪と触れ合うと音をだす。このように生存する者も離れていれば、触れることもないし、音をだすこともない。二となり三となると、互いに触れ合って争って議論をする。自分は、カシュミールとガンダーラの二王国の住民を支配している。自分も一つの腕輪のように、他を支配することなく、自分を支配して住すべきである。」と思った。王は、腕輪の摩擦を対象とし、居ながらにして、「諸行無常、一切皆苦、諸法無我の」三相 (tṛi lakṣaṇāni) を観察し、観 (vipassanā) を増大させて辟支菩提智 (paccekabodhiñāṇa) を起した [Ataka III, pp. 377-378]。

二つの腕輪は触れ合って音をだすが、一つだけでは音をださないことを知って、出家して独り遊行することを勧めた物語は『ジャータカ』五三九「マハージャナカ・ジャータカ」にも伝えられている。したがって、この腕輪の話は古くからあって、「犀角経」では犀の角の喩と結びついて説かれ、ナッガジ王物語では辟支佉と結びついている。

次にカリンガ国のカランドウ王の物語をとりあげたい。王が庭園を歩いているとき、おいしい果実を沢山つけているマンゴーの樹を見つけ、象の背に乗って、手をのばして、その一房をもぎ取り、持ち帰って食べた。その後、大臣

やバラモン達がつぎつぎとやって来て樹に登り、棒でたたき、枝を落として、熟していない実をも残らず食べてしまった。夕方、王がそのマンゴーの樹のところを通り、象からおりて、樹を眺めながら、「この樹は、朝のうちは、見ていると飽きないほど果実をつけて、きれいであったが、今ではその果実はみな取られ、みすばらしく立っている。」と考えた。王は、他のところに立っている、実をつけないマンゴーの樹を見つけ、「このマンゴーの樹は果実をつけないが、宝石の裸山のように美しく立っている。しかし、あの樹は、果実をつけていたために不運になった。家庭のこの生活は実のついた樹に似ており、出家生活は実のつけない樹に似ている。裕福な者には恐怖があり、貧しい者には恐怖がない。自分も実をつけない樹のようにならなければならぬ。」と考えた。そこで、王は果実を所縁として辟支菩提智 (paccekabodhiñāna) を得た [Jātaka, III, pp. 376-378]。

この物語と直接結びつく詩は「犀角経」のなかにないけれども、

「実に欲望 (āna) は種々で、甘く、心に楽しく、さまざまなかたちで心を乱す。〔五〕種欲には患いあることを見て、犀の角のように独り歩め。」 [Sn, 50]

「これは、私にとって患いであり、腫物であり、禍であり、病であり、矢であり、恐れである。〔五〕種欲にこの恐怖あることを見て、犀の角のように独り歩め。」 [Sn, 51]

の二詩は、人々が欲しがると、欲望の対象になるものには禍があり、恐怖があることを説いている。また、次の詩はカランドゥ王物語と同じモチーフである。

「在家者のしるしを除き去って、葉に覆われたパーリチャッタ樹のように、袈裟の衣をつけ、出家して、犀の角のように独り歩め。」 [Sn, 64]

この詩に対する注釈『バラマッタ・ジョーティカ』[P], II, p. 116-117] において、カランドゥ王物語と同類の物語を記している。すなわち、王が、葉に覆われ、花をつけたパーリチャッタ樹を見つけ、花を一つ取ったところ、大臣や

兵士たちもつきつきと花を取り、葉まで取ってしまった。夕方、王がそれを見つけ、葉に覆われ、花をつけない別の樹を見ながら、花をつけた樹は人々に欲しがられたので、災難にあってしまった、云々と思った。カランドゥ王物語とまったく同じ筋書きになっている。

以上、両腕につけた腕輪は音をださないことを観察して辟支仏になったガンダーラ国のナツガジ王物語と「犀角経」第四八詩、第四九詩との関連性、および、マンゴーの樹を縁として辟支仏になったカリンガ国のカランドゥ王物語とモチーフを共通にする第五〇詩、第五一詩、第六四詩についてとりあげてきた。ところで、このような関連性、モチーフの共通性をもとにして、「犀角経」と辟支仏との結びつきについて、どのように考えるべきであろうか。

五

辟支仏は、仏教だけでなくジャイナ教でも (patteyabuddha, pattakabuddha) 説かれている。しかし、仏教、ジャイナ教ともに、古層に属する經典には辟支仏は説かれていない。その起源は、仏教、ジャイナ教の外にあったと考えられる^⑨。仏教、ジャイナ教ともに共通するナツガジ王等の四王の辟支仏説話も、その源流は仏教、ジャイナ教外にあったものであろう。

仏教内に辟支仏が説かれるようになったとき、外来の辟支仏を仏教の伝統の中に位置づける必要があったにちがいない。「犀角経」が辟支仏と結びついたのは、そのためであると思われる。「犀角経」は、「犀の角のように独り歩め」という句をもってうたわれた、汚れない、自由で不動な境地に至った修行者についての詩である。このような境地の修行者は、辟支仏の姿であると考えられたためである。さらに、外来の辟支仏説話(ナツガジ王、カラカンドゥ王)に共通する詩が、すでに「犀角経」の中に含まれていることによって、「犀角経」と辟支仏とが結びつきやすい要素がそなわっていたと考えられる。

- ① Le Mahāvastu, par É. Senart, Tome I-3, Paris, 1882, 1890, 1897. Vol. 1, pp. 337-339.
- ② 藤田宏達「三乗の成立について―辟支仏起源考―」『印度学仏教学研究』五二二、昭和三二年、九三頁上、九八頁、註一九。
- ③ 習近親愛与怨憎 便生貪欲及瞋恚 故諸智者俱遠避 独処経行如麟角 『大毘婆沙論』卷二二六(大正二七、六七〇a)。
- ④ 『大毘婆沙論』卷四六。
- ⑤ Edgerton: Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary.
- ⑥ 櫻部建「縁覚考」『大谷学報』三六一三、昭和三二年、四八頁。
- ⑦ 櫻部建前掲論文、四八頁。
- ⑧ Uttarādhyāyana-sūtra, ed. by J. Charpentier, XVIII, 46. 藤田宏達前掲論文、九五頁。K. R. Norman: The Pratyekabuddha in Buddhism and Jainism. Collected Papers on South Asia. No. 4. pp. 93, 94. Norman 論文については、仙台電波工業高等専門学校の山崎守一先生の御好意によつて読むことができた。村上真完・及川真介『仏と聖典の伝承』春秋社、三三七―三三八頁。四王の辟支仏物語とジャイナ教の辟支仏物語については、Jarl Charpentier: Paccakabuddhageschichten, Upsala, 1908 に論じられている。高野山大学の谷川泰教先生の御好意によつて Charpentier の書を披見することができた。
- ⑨ 藤田宏達前掲論文、九五頁。山田明爾「辟支仏・独覚・縁覚」『龍谷大学論集』第四一五号、一〇八頁。

略号

- Kalpa Kalpasūtra, Prakrit Bharati Series Text 1.
- JātaKa Jātakathavaṅṅanaṁ, PTS, 1963.
- CND Cullaniḍḍesa シキド本
- Paṇḥa Paṇḥavāgaraṅṅam, Ladnun.
- Pj II Paramattha-jotikā II, PTS, 1916-18.
- Sn Suttanipāta, PTS.
- Sūya Ācārāṅgasūtram and Sūtrakrihāṅgasūtram, Lalā Sundarīlā Jaina Āgamagranthamālā Vol. 1.